

能の『源氏物語』

——「源氏能」は何を描くのか——

石井倫子*

I はじめに

能の多くが『伊勢物語』『源氏物語』『平家物語』といった有名な古典作品に取材している。これらは「古典」とは言いながらも、この時代の知識人達にとっては馴染みのある、いわばベストセラーであり、ストーリーは原作そのままではなく、さまざまなアレンジを加えながら舞台化していく。その意味で、現代の二次創作に近いといえるのだが、とりわけ『源氏物語』に取材した「源氏能」にその傾向が強い。

「源氏能」の登場人物としては、以下の人物が挙げられる。

空蟬	〈空蟬〉〈碁〉
夕顔	〈夕顔〉〈半菰〉
六条御息所	〈葵上〉〈野宮〉
明石上	〈住吉詣〉
朝顔斎院	〈権〉
玉葛	〈玉葛〉
落葉宮	〈京落葉〉〈陀羅尼落葉〉
浮舟	〈浮舟〉〈木霊浮舟〉
光源氏	〈須磨源氏〉〈住吉詣〉

意外なことに、『源氏物語』を語る上では外すことの出来ない藤壺・紫の上、さらには女三の宮といった女君が源氏能には登場しない。その代わりに、〈葵上〉と〈野宮〉のように、一人の人物に対して二つの作品が作られることも多いのが特徴といえる。天野文雄氏は准抛論的視点から、作り物語

の登場人物が化身や亡霊という形であらわれ生前の体験や死後の苦悩を語る理由を「これらの人物が基本的には実在の人物と考えられていたから」としている¹。絵空事ではないリアリティという意味では氏の見解に従うべきであろうが、源氏の女君はいずれも多かれ少なかれ鬱屈したものを抱えているはずで、もっと多くの女君が妄執にとらわれ成仏できない我が身を嘆いてもよさそうではある。

夢幻能は長いスパンの物語を舞台化するというよりは、印象的な場面やある特定のエピソードを描くことに向いているので、「あの女君といえばあそこのシーン」という具体的なイメージが湧きやすい人物、舞を舞わせやすい人物が好まれるということがあるのだろう。

また、プロの能役者の作よりも横越元久(細川満元被官)・内藤河内守(細川家被官)・太田垣忠説(山名氏被官)ら被官人クラスの作者の手によるものが多いことも無関係ではない。この時代、武士の間で文芸愛好の風潮が高まり、『源氏物語』に関しても本文・注釈書類の蒐集は言うに及ばず、三条西実隆のような知識人や宗祇などの連歌師を講師に迎え、源氏講釈が催されていた。そのような環境に身を置く主人に仕える被官人層もまた『源氏物語』への関心・理解を深め、ついには創作意欲を刺激されて能作に手を染めるに至ったという過程は想像に難くない。彼らにとって『源氏物語』は和歌・連歌の教科書であり、梗概書や連歌寄合などによって『源氏物語』の知識を得ていたことを考えると、源氏能が短いながらも印象

*日本女子大学教授

的なエピソードを好んで素材としていることも納得がいく。

源氏能は作る側・見る側ともに『源氏物語』を知っている」という意識を共有するツールとしての一面を持っていることも踏まえながら、以下では具体的な作品を取り上げ検討してみる²。

II 世阿弥以前

世阿弥以前の能において、『源氏物語』は次のような形で摂取されている。

【資料1】『五音下』所収「西国下」

……須磨の浦にもなりしかば、四方の嵐も激しくて、関吹き越ゆる音ながら、後の山の夕煙、柴と云物ふすぶるも、見慣れぬ方のあはれなり……舟より車に乗り移り、暫しここにと思へども、須磨や明石の浦づたひ、源氏の通ひし道なれば、平家の陣にはいかがとて、又この岸を押し出だす。

【資料1】は連歌師琳阿弥（玉林）作詞・観阿弥作曲の平家一門の西国落を描いた曲舞で、「源氏能」そのものではないのだが、都を追われた平家一門の姿を源氏の須磨蟄居のイメージを用いて描写しており、源氏寄合や源氏語が至るところに散りばめられている。

次の【資料2】は將軍義満のブレインであった海老名南阿弥が「源氏の謡」の節付を面白いと褒めたという記事である。

【資料2】『申楽談儀』（永享二年（1430）成立）

「光源氏と名を呼ばる」、此「と」文字、律にて突くべし。同じ声にては突くべからず。南阿弥陀仏、面白しといはれし節也。

海老名南阿弥は永徳元年（1381）没であることから、この「源氏の謡」は世阿弥19歳以前の成立と判明する。現行〈須磨源氏〉の第四段に相当するが、節付が独特なことから、もともと田楽喜阿弥作曲の独立の謡い物であった可能性が高いとされている。

【資料3】「源氏の謡」

[クリ] \忘れて過ぎしいにしへを語らば袂やしほれなむ。我うつせみの空しき世を案ずるに。桐壺の夕べの煙たえぬ思ひの涙をそへ。
[サン] いとどしく虫の音しげきあさぢふの。露けき宿に明かしくらし。小萩がもとのさびしさ迄。はこゝみ給ひし御恵み
[クセ] いともかしこき勅により。十二にて初冠。高麗国の相人の。つけたりしはじめより。光源氏と名を呼ばる。帚木の巻に中將。紅葉の賀の巻に正三位に叙せられ。花の宴の春の夜に。行衛も知らで入月のおほろけならぬ契りゆへ。年廿五と申せしに。津の国須磨のうら海土人かなげきを身につみて。次の春播磨の明石の浦づたひ。とはず語りの夢をさへうつゝにかたる人もなし。さる程に天下に。奇特の告げありしかば。又 都にめしかへされ。数のほかの官をへて。〈上〉その後うちつゞき〈同〉みをづくしに内大臣乙女の巻に。太政大臣藤の裏葉に。太上天皇かく樂しみを極めて光る君とは申すなり。

「源氏の謡」は「光源氏と名を呼ば」れた桐壺巻に始まり、高麗国の相人の古いどおり「樂しみを極めて」、「光る君」の呼び名が改めて実感された藤裏葉巻をもって閉じられる。光源氏の一代記に源氏の巻名を織り込んだ年立風の叙述には、次に掲げる『源氏系図小鏡』との類似が指摘されている³。

【資料4】『源氏系図小鏡』⁴

○第二の御子は源氏也。桐壺更衣腹、三にて御母失せ給ふ、十二にて初冠、高麗国の相人のつけたりし、そのゆへに、光源氏と申也。帚木の巻に中將、紅葉賀に正三位、御賀の比は宰相の中將、葵に大將かけ給ふ。過にし（南殿の）花の宴の比、入る方知らで見し月の空にあくがれ給しに、賢木の巻に尚侍の君御里いでの時まちて、かたみに心ひく網の、度重なれる契りゆへ、年廿五の春の暮、津の国須磨のうらめしきあまのなげきを御身につ

み、又、廿六やよひには、播磨のあかしの浦
づたひ、をかべの宿の仮枕、うきをなぐさむ
よすがにて、君（さて）廿七葉月には都へか
へりおはしまし、御よろこびも数の外、権大
納言になり給ふ、潩標に手車の宣旨、乙女の
巻に太政大臣、藤裏葉に太政天皇、かく楽し
みを極めつつ、四方にあまねき御栄へも、限
りあるかな……

【資料3】二重下線部と【資料4】波線部の近
さは一目瞭然で、「源氏の謡」が『源氏系図小鑑』
系の梗概書の知識によって作られており、前述の
「西国下」同様、和歌・連歌的な知識に基づいた
ものであることが確認できる。

【資料5】『申楽談儀』

犬王は、上三花にて、つるに中上にだに落ち
ず。中・下を知らざりし者也……葵の上の能
に、車に乗り、柳裏の衣踏み含み、車副の女
に岩松、車の轅にすがり、橋がかりにて、「三
の車に法の道、火宅の門をや出でぬらん、夕
顔の宿の破れ車、遣る方な」と一声て遣りか
けて、たぶくと言ひ流し……言ひ納めに、と
たと拍子踏みし也。後の霊などにも、山伏に
祈られて、山伏はとよ、それをばかへりみづ
かひ、小袖扱い、えも言はぬ風情也。

これは近江猿楽の犬王が演じた〈葵上〉につい
ての記述である。下線部のように、六条御息所は
車に乗り車副の女房とともに登場するなど、現行
とはかなり違う演出であったことがわかる。照日
の巫女・山伏による怨霊の調伏など『源氏物語』
には登場しない人物が活躍しており、『源氏物語』
からの文章引用もみられない。『源氏物語』から
の乖離が著しく、梗概書などの知識だけでも作れ
る内容で、『源氏物語』の忠実な舞台化を意図し
たものとは到底考えられない⁵。

以上から、世阿弥以前の時代には、『源氏物語』
は和歌・連歌の世界を媒介にした源氏寄合や梗概
書など知識に基づいた、語句の引用レベルの撰取
が中心であったと考えられる。

Ⅲ 世阿弥時代

世阿弥と『源氏物語』とのかかわりは少年時代
に遡る。初めて少年時代の世阿弥（藤若）と対面
した二条良基は、仲介役の東大寺尊勝院別当の経
弁に宛てた書状の中で、「光源氏の花の宴に、春
の鶯囀といふ楽を、花の陰にて舞はれて候し夕映
のほども、かくこそとおぼえ候し」「春の曙の霞
の間より樺桜の咲きこぼれたる」と『源氏物語』
「花宴」巻や「野分」巻の描写を用いながら世阿
弥の美しさを褒め称えている。世阿弥自身が『源
氏物語』的な幽玄美を体現した存在とみなされて
いたと言ってもよい。

そんな世阿弥は、息子の元能に与えた能作マ
ニュアル『三道』（応永三十年（1423）成立）で、
男体に相応しい「舞歌遊風の名望の人」として「業
平・黒主・源氏、如_レ此遊士」を挙げ、貴人の女
体の例としては次のように述べている。

【資料6】『三道』

一、女体の能姿。風体を飾りて書くべし。其
内に於きて、上々の風体あるべし。あるひは
女御・更衣、葵・夕顔・浮舟などと申たる貴
人の女体、気高き風姿、世の常ならぬかゝ
り、よそをいを、心得て書くべし。しかれば、
音曲・よしかゝりをも、よく／＼心得て、道
の者の曲舞音曲などのやうにはあるまじき也。
長けたるかゝりの、美しくて、幽玄無上の位、
曲も妙声、ふり・風情もこの上はあるべから
ず。少しも不足にては、叶ふべからず。

かやうなる人体の種風に、玉の中の玉を得
たるがごとくなる事あり。如_レ此の貴人妙体
の見風の上に、あるひは六条御息所の葵の上
に付崇り、夕顔の上の物の怪に取られ、浮舟
の憑物などとして、見風の便りある幽花の種、
逢ひがたき風得也。古歌云、「梅が香を桜の
花に匂はせて柳が枝に咲かせむ」より、なを
有りがたき花種なるべし。

夕顔や浮舟を「貴人」に含めるのはいささか違

和感があるが、これが世阿弥の理解であった。「玉の中の玉を得たるがごとくなる」美的情緒としてこれらのやんごとなき女君が何か物怪などに憑かされているうつない姿を掲げている点に、貴人の女性に対する世阿弥のサディスティックな眼差しが感じられもするが、世阿弥にとって、本来舞を舞うような立場ではない女性に舞的な演技をさせるには「憑き物による狂乱」という設定が必要だったのだろう。余談ながら「古歌云」で引かれる「梅が香を桜の花に匂はせて」の和歌（後拾遺・春上・中原致時）は、『源氏物語』「薄雲」巻で

人びと、御格子など参りて、「この御茵の移り香、言ひ知らぬものかな」「いかでかく取り集め、柳の枝に咲かせたる御ありさまならむ」「ゆゆしう」と聞えあへり。

と引かれていることにも注意しておきたい。

世阿弥は〈敦盛〉〈忠度〉などの修羅能で源氏寄合に基づいた源氏語を多用している。また、細川満元の被官人・横越元久が作詞した〈浮舟〉に節付を施し、「浮船、松風などやうの能に相応たらんを、無上の物と知るべし」（『申楽談儀』）と高く評価しており、本曲が後の源氏能や女体夢幻能のスタイルを決める作品となったこと⁶、節付のみならず詞章にも世阿弥の手が入っている可能性⁷などが指摘されている。

また、『五音上』に「須磨 付源氏」と作詞作曲者名なしで「是ハ津ノ国スマノ浦ニ」と〈須磨源氏〉前シテ登場段の一節を引いていることから、後述のように世阿弥が前掲「源氏の謡」を用いて〈須磨源氏〉を作った可能性も考えられる。しかしながら、世阿弥作が确实視される作品の中には「源氏能」が含まれていないのである。世阿弥と深い関係のあった二条良基が『源氏物語』を愛好し、和歌や連歌の世界に積極的に源氏語を取り込んでいたことや、『源氏物語』の梗概書や源氏寄合が作られていた時代背景を考えると⁸、これはいかにも不自然に思われる。

足利義満と『源氏物語』との関係についてはさ

まざまに論じられているが⁹、とりわけ有名なのが、応永十五年（1408）三月の後小松天皇北山行幸であろう。『源氏物語』紅葉賀を彷彿とさせるこの行幸について、関白一条経嗣が、

【資料7】『北山殿行幸記』

さても若君は、赤色の脇開の御衣、躑躅の下重、山吹の御上の袴、松襲の御半臂など奉りて、総角したまへる面つき、顔の匂ひたとへんかたなく美しげにぞ見え給ふ。光源氏の童姿もかくやと覚えたり。げに只今咲き出づる花ともてはやされ給へる御事なれば、申すも中々をろかなり。

と「若君」、すなわち義満が偏愛する義嗣（義持の異母弟）を光源氏の童姿に擬えていることは有名である。

前掲「源氏の謡」には光源氏の一代記が綴られていた。これは貞治五年（1367）に従五位に任ぜられて以来義満が、

応安六年（1373）参議・左中将
 永和元年（1375）従三位
 永和四年（1377）権大納言・右大将
 康暦二年（1380）従一位
 永徳元年（1381）内大臣
 永徳二年（1382）左大臣
 永徳三年（1383）准三后
 応永元年（1394）太政大臣

と破格の官位待遇を受けていること、義満の没後ただちに「太上天皇」の尊号が追贈された（但し、この尊号は義持の意向で辞退されたので、実際にはなかったこととなっている）ことを想起させずにはおかない。

〈須磨源氏〉の後場において、シテは単なる亡霊ではなく

【資料8】〈須磨源氏〉東大史料編纂所蔵 観世元頼節付本

A 〈入ハシテサシ〉 \ あら面白いの海原やな。
我娑婆に有し時は。光源氏といはれ。今は兜率にかへり。 天上の住居なれ共。月に詠じて

闇浮に下り。所も須磨の浦なれば。青海波の遊樂にひかれて月の夜しほの波。(第七段)

B〈上ロンギ地〉\雲となり雨となり。／＼。夢うつゝともわかざるに。天より光さす 御影の中にあらたなる。童男来り給ふぞや。扱は名にし負ふ 光源氏の尊霊か (第八段)

と兜率天の存在として登場する。倉持長子氏はこの後シテに聖性と王権の頂点に立つ「童男」としてのイメージが付与されていると指摘するが¹⁰、このような完璧な光源氏像は、栄華を極めながらも愛執や迷妄から逃れられない『源氏物語』の光源氏とはあまりにもかけ離れている。

(須磨源氏)は「駄作」という評価が一般的で、世阿弥作を否定する向きもあるが¹¹、世阿弥がこの北山行幸に当て込んで後シテに義満をオーバーラップさせて作った、いわば宛て書きの可能性を考えてみても良いのではないか。そうであれば、妄執など一切持たない「光源氏の尊霊」としてのシテの造形はむしろ当然のことといえる¹²。

皮肉なことに、義満はこの北山行幸の二ヶ月後に四十九歳で亡くなり、政治の実権は義持に移った。『源氏物語』を通じて後小松上皇や広橋兼宣とも交流がある義持も、耕雲に命じて『源氏物語』本文や梗概書・注釈書の書写なども行わせており、『源氏物語』に造詣が深かったことが明らかになっているが¹³、その義持が苦々しい思いで見つめていたに違いない義嗣のお披露目の場となった北山行幸をあからさまに想起させる〈須磨源氏〉を演じることは到底不可能であろう。世阿弥が源氏能を残していないこと、世阿弥時代に成立しているはずの〈須磨源氏〉に演能記録がなく、寛文元年以降の書上においても各流にない遠い曲とされていることの背景には、そういった政治的な事情が関係しているのではないか。

IV 禅竹時代

世阿弥の娘婿である金春禅竹と『源氏物語』と

のかかわりを示すものとして、禅竹の能楽論『歌舞髓脳記』『六輪一露秘注』(文正本)が挙げられる。

【資料7】『歌舞髓脳記』(康正二年1456)跋文……然即、一指の舞袖、一音之曲位、一踏之足音まで、みな幽極之心を含て余情・風流をなさんこと、をろかなるべからず。強・俗・雑之風姿の身、力動音勢、昔は更に沙汰なかりしことなり。源氏の心にも、上果の位は、俗人・博士の古様なるよりも、雲の上人の、興に乗じて舞踏し給ふらん青海波とかや、紅葉の影より舞出給ひけん、光も匂ひも深からん位、げに及びなくとも心に染めたらんや、此道の思出たらん。此心よく悟り知らんこと、有りがたくや。古様・新体の位風、道の灌頂なるべき歟。

【資料8】文正本『六輪一露秘注』(文正元年(1466)成立)

四、像輪は、品々の物まね……潮波・木樵・炭焼の賤態も、光源氏の物語、片端も耳に触れ、其心を思ひ深めて、須磨や明石、小野の奥までも、住居によらぬ心を添へて、俗に賤しからざるべし。舞人・楽人の古様なるよりは、紅葉の蔭より光源氏の青海波とかや舞出給ひけん御面影、あはれ此道之思出ぞかし。かなはぬまでも、心は雲井の上にこそ、なさばならめと存。如何。

禅竹は「雲の上人」である光源氏が舞った青海波の舞こそが「道の灌頂」であり、能役者が目指さなくてはならない歌舞の位であるとし、たとえ下賤な者の物まねであっても心だけは源氏の青海波の舞を思い描くべきだと主張している。『源氏物語』『紅葉賀』巻で光源氏が舞った青海波への強い拘りからは、『源氏物語』に対する深い理解が窺われよう。

能作においても、先述の通り、世阿弥時代までは源氏寄合や源氏語の使用といった語彙レベルの引用が中心であったものが、禅竹に至ってようやく〈野宮〉〈玉葛〉のような『源氏物語』の二次

創作的作品が作られるようになったといっただけよい。光源氏との最後の逢瀬を回想しながらも、車争いで傷付いた自尊心ゆえの妄執に苦しむ六条御息所を描く〈野宮〉、恋の妄執ゆえに死後もなお苦しむ玉葛の姿を描く〈玉葛〉、いずれも『源氏物語』のワンシーンの再現などではなく、禪竹のまなざしは主人公の内面に向けられている。

松岡心平氏は〈定家〉〈楊貴妃〉〈小督〉など源氏能以外の禪竹作品にも『源氏物語』の影響が看取されると述べ、一例として〈小督〉のシテ仲国出発の際の「上げ歌」が『源氏物語』「明石」巻の「秋の夜の月毛の駒よわが恋ふる雲居をかけれ時の間も見ん」を踏まえた表現で、『源氏物語』をしっかりと読み込んだ上で文脈ごと能に取り込もうとする禪竹の姿勢を指摘している¹⁴。

一五世紀半ばの成立とされる『源氏大綱』には次のような式子内親王と定家の悲恋が語られているが、これも〈定家〉と無関係ではない。

【資料9】『源氏大綱』「真木柱」巻

一、ある物語に、式子内親王に定家の卿、心をかけて、忍び契り給ふを、後鳥羽院聞し召して、大に誓いをさせ給へり。内親王明日より契るべからずとて、誓文を立て、扱、其暮に、内親王、定家卿へ、

ながらへてあすまで人はつらからじ此夕暮にとはばとへかし

御門の前にて、誓いをたつる程に、明日より参逢ふべからずといふ歌也。其暮に、定家卿来り給へば、内親王手をとり、涙をはら／＼と流し、面をも胸にをしあて、件の意趣を語り給へり。此思ひが初めと成て、定家卿後に死せり。内親王も果て給ふ。されば定家卿の思ひ、葛と成て、内親王の墓をとりまき給へりと也。其時、定家卿、歌に、

せめてげに今一度の逢ふ事は渡らん川や
しるべなるらん

禪竹が『源氏物語』を自家葉籠中のもので能作に撰取していくに際して、正徹の存在が大き

かったことは想像に難くない。

禪竹と交流があったことが知られる正徹は、了俊に教えを受け『源氏物語』講義を生業の一つとし、將軍義政にも講じたほどの源氏通で、正徹本『源氏物語』の存在も知られている。『正徹物語』には古歌を『源氏物語』を例示しながら説明する箇所がある。一例を挙げよう。

【資料10】『正徹物語』第三十八段

ふるき歌に、

忘らるる身をば思はず誓ひてし人の命の
惜しくもあるかな

これは、「誓ひを憑む恋」の題にかなふべきにや。人の我に「神かけて忘れじ」とちかひごとをして忘れぬるを、「我かく忘るるよりも、人の誓ひの罰あたりて、死ぬべき命がなほ惜しき」といふ歌の心なり。源氏の御方より紫の上の方へ、明石の上のことをとはずがたりし給ひし返事に「忍びかねたる御夢がたりに、おぼしめす御事おほくなむ。誓ひしこともあれば」とありしに、紫の上の返しに「身をば思はず」と書き侍りしは、この歌をぞ書きたるなり。

正徹は実際の詠歌に際して、伝統的な題意を『源氏物語』を踏まえて解釈し変えたり、作中歌の対象を置き換えて撰取したりと新たな表現の開拓を模索していたこと¹⁵、物語の場面を象徴するような詞を地の文なり作中から選び取り、それを歌全体にいくつも散りばめ、連歌の付合のようにして詠んでいること¹⁶が指摘されている。これは禪竹の源氏能における源氏取りとも通ずる手法である。

この時代の源氏注釈のあり方について、稲賀敬二氏は

和歌の必須教養である源氏は、その教養が源氏の注釈の内容を豊かにする方へも作用し、その風潮が、源氏を説明するために、逆に源氏をふまえて作られた歌を以てするという形をも生む。正徹の歌を今川範政が『源氏物語

提要』の中に引き用いるなどの例である。

と述べている¹⁷。『花鳥余情』を著した一条兼良も禪竹と交流があったことが知られるが¹⁸、『康富記』文安元年（1444）二月三十日条には、中原康富が初めて兼良の源氏談義を聴聞しに出掛けたことが記されており、

予朝食以後早出了、今日初所参入也、参一条殿、源氏御談義令聴聞、乙女卷被始遊之、至中程、大納言殿御方・日野前大納言・正徹書記・冷泉中将持為朝臣・同少将為富・常光院堯孝僧都・北面定衡・隨身兼任・大夫史篤忠朝臣・季長朝臣・盛長朝臣・宗砌、其外発起禅僧通世者等、济々参候之、予聊遅参、

兼良の源氏談義を聴くために、正徹、冷泉持為、堯孝、宗砌ら当時の文化人らが一堂に参集している点は注目に値しよう。『源氏物語』の深い読みに基づいた二次創作的な性格の濃い禪竹の源氏能は、このような源氏講釈の場や、饒舌な梗概・注釈書によって育まれていったのである。

V おわりに

以上、駆け足ながら『源氏物語』と源氏能との距離を概観してきた。世阿弥以前から禪竹の時代にかけて、源氏寄合などを通じての「源氏詞」の撰取から始まり、『源氏物語』の有名な場面の舞台化（現代でいう「2.5次元ミュージカル」的な）、『源氏物語』の深い読みに基づいて作者自身が再構築した物語世界を描き出す二次創作的源氏能へという大まかな流れを追うことができる。

これは能作者個人の志向云々の問題ではなく、『源氏物語』受容の問題と密接に関わるものである。今回は紙幅の都合で素人作者である被官人層の武士たちについては殆ど言及することができなかったが、源氏能の多くが彼らによって作られていたことの意味は大きい。『源氏物語』は一種の社会現象になっていたのである。

注

- 1 「源氏物の夢幻能ではなぜ物語中の人物が亡霊として登場するのか」（『能苑逍遙（中）能という演劇を歩く』大阪大学出版会、2009年）
- 2 なお、源氏能の全体像や先行研究に関しては山中玲子「源氏物語と能一年譜と解題一」（新時代の源氏学10『メディア・文化の階級闘争』竹林舎、2017年）、「源氏物語と能楽研究」（『能と狂言』15、ベリかん社、2017年7月）に詳しくまとめられているので、そちらを参照されたい。
- 3 落合博志「『源氏物語』と能一（葵上）を中心に一」（『国文学解釈と鑑賞』59-11、1994年11月）
- 4 稲賀敬二『源氏物語の研究—成立と伝流—』（笠間書院、1967年）
- 5 前掲（3）落合氏稿
- 6 山中玲子「『源氏物語』と女体夢幻能—「源氏能」はどのように成立したのか」（『平安文学の古注釈と受容』三、武蔵野書院、2011年）
- 7 三宅晶子「世阿弥は『源氏物語』を読んでいたか—（浮舟）〈頼政〉（班女）を検討する—」（『観世』75-6、2008年6月）
- 8 小川剛生「室町期の武士と源氏物語」（『能と狂言』15、ベリかん社、2017年7月）
- 9 兵藤裕己「歴史としての源氏物語—中世王権の物語—」（『源氏研究』第三号、1998年4月）、松岡心平「世阿弥と『源氏物語』」（『中世文学』45、2000年8月）三田村雅子「足利義満の青海波—「中世源氏物語」の〈領域〉—」（『物語研究』1、2001年3月）他
- 10 「『須磨源氏』における「須磨」考」（『聖心女子大学大学院論集』32-2、2010年10月）
- 11 本作の研究史については西村聡「作品研究「須磨源氏」（『観世』60-3、1993年3月）に丁寧にまとめられている。
- 12 この点については拙稿「甦る光源氏—〈須磨源氏〉から〈融〉へ—」（『むらさき』第五四輯、2017年12月）で私見を述べた。
- 13 小保内進「將軍足利義持と『源氏物語』—一応永二十五年の源氏物語書写について—」（『國學院雑誌』109-9、2008年）
- 14 「源氏物語を読む金春禪竹」（『ZEAMI 中世の芸術と文化』3、森話社、2005年10月）
- 15 江草弥由起「正徹の物語歌撰取考」（『中世文学』59、2014年6月）
- 16 阿尾あすか「正徹の『源氏物語』撰取について」（『物語の生成と受容④』、国文学研究資料館、2009年3月）
- 17 『源氏物語注釈史と享受史の世界』（新典社、2002年）
- 18 三宅晶子「一条兼良と金春禪竹」（『中世文学』48、2003年6月）